

(3) 大麦

○2014/15 年度の大麦需給（予測）のポイント

生産量は、ロシア、ウクライナ等で増加するものの、カナダ、豪州等で減少することから、世界全体では減少すると見込まれる。

消費量は、カナダ、EU等で飼料用需要の減少等により前年度より減少することから、世界全体では減少すると見込まれる。

期末在庫量は、消費量が生産量を上回ることから在庫が取り崩され、期末在庫率は低下すると見込まれる。（表 IV-21）

表 IV-21 世界の大麦需給

（単位：百万トン）

区 分	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15 (予測)	対前年度 増減率(%)
生産量	123.1	133.5	129.8	145.4	139.7	▲ 3.9
消費量	136.2	135.2	131.7	141.1	140.8	▲ 0.2
うち飼料用	91.3	91.7	89.0	97.4	95.5	▲ 1.9
貿易量	15.9	20.4	19.6	22.9	23.6	3.1
期末在庫量	24.3	22.7	20.8	25.0	24.0	▲ 4.3
期末在庫率	17.9%	16.8%	15.8%	17.7%	17.0%	▲ 0.7

資料：USDA「Grain : World Markets and Trade」、 「World Agricultural Production」、 「PS&D」 (January 2015)

注： 1) 年度区分は、2014/15 年度についてみると、生産量は北半球の 2014 年産冬大麦（収穫は 6 月～8 月）、同春大麦（同 8 月～10 月）及び南半球の春大麦（同 11 月～11 年 2 月）の計（見込み）であり、消費量、貿易量、期末在庫量は各国市場年度（末）の計（見込み）である。

2) 貿易量とは輸出量を意味する。

3) 期末在庫率の対前年度増減率は前年度とのポイント差である。

ア 生産量

2014/15 年度の生産量は、ロシア、ウクライナ等で前年度を上回るものの、カナダ、豪州等で前年度を下回ることから、世界全体では前年度より 5.6 百万トン減少（▲3.9%）し、139.7 百万トンになる見込みである。

なお、2014/15 年度の世界全体の生産量に占める国・地域別の割合を見てみると、世界第 1 位の EU が 43%、第 2 位のロシアが 14%、第 3 位のウクライナが 7%と、上位 3 カ国・地域で全体の 6 割以上を占める見込みである。（表 IV-21、表 IV-22、表 IV-23、図 IV-21）

EU では、単収が豊作であった前年度をわずかに下回る（▲0.2%）するものの、生育期間中は総じて好天に恵まれて収穫面積が増加（0.6%）することから、前年度より増加（0.5%）し、59.9 百万トンになる見込みである。なお、単収は前年度を下回るものの、過去 5 年平均を上回っている。

国別には、フランスでは、北東部で 2014 年 3 月から 4 月の雨不足の影響で栄養成長期を迎えた春大麦の生長が阻害されたものの、冬大麦は生育期間を通じて土壌水分量が十分となり、同国全体では作付面

積、単収ともに前年度を上回ることから、生産量は 11.7 百万トン（対前年同月比 13.4%増）となる見込みである。また、ドイツでも、温暖な気候と適期の降雨に恵まれ、特に冬大麦の作柄は良好となり、収穫面積及び単収ともに前年度を上回ることから、生産量は 11.6 百万トン（同 12.1%増）となる見込みである。一方、スペインでは、収穫面積が増加したものの、4 月半ばから 5 月にかけての高温乾燥型の天候により土壌水分不足のまま乳熟期を迎えたことが単収低下につながり、生産量は 6.9 百万トン（同▲ 31.1%）と前年度を下回る見込みである。

ロシアでは、春大麦の作付時期の天候は概ね良好で、初夏に高温乾燥型の天候となり土壌水分量が不足したものの、その後の降雨と気温低下を受けて作柄が回復した。生産量は、収穫面積が増加（2.2%）するとともに単収も上昇（24.0%）することから、生産量は前年度より増加（26.7%）し、19.5 百万トンになる見込みである。

表 IV-22 世界の大麦生産の状況

(単位:百万トン)

区分	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15 (予測)	対前年度 増減率(%)	世界に占める 割合(%)
世界合計	123.1	133.5	129.8	145.4	139.7	▲ 3.9	100
E U	53.7	51.9	54.9	59.6	59.9	0.5	43
ロシア	8.4	16.9	14.0	15.4	19.5	26.7	14
ウクライナ	8.5	9.1	6.9	7.6	9.4	24.3	7
豪州	8.0	8.2	7.5	9.5	7.6	▲ 20.3	5
カナダ	7.6	7.9	8.0	10.2	7.1	▲ 30.4	5
(参考)							
米国	3.9	3.4	4.8	4.7	3.8	▲ 18.4	3

資料：USDA「World Agricultural Production」、 「PS&D」 (January 2015)

表 IV-23 大麦の 2014/15 年度収穫面積及び単収

区分	生産量		収穫面積		単収	
	(百万t)	対前年度 増減率	(百万ha)	対前年度 増減率	(t/ha)	対前年度 増減率
世界合計	139.7	▲ 3.9 %	49.21	▲ 3.0 %	2.84	▲ 1.0 %
E U	59.9	0.5 %	12.44	0.6 %	4.82	▲ 0.2 %
ロシア	19.5	26.7 %	8.20	2.2 %	2.38	24.0 %
ウクライナ	9.4	24.3 %	3.20	▲ 0.9 %	2.94	25.6 %
豪州	7.6	▲ 20.3 %	3.80	▲ 3.1 %	2.00	▲ 17.7 %
カナダ	7.1	▲ 30.4 %	2.14	▲ 19.2 %	3.33	▲ 13.7 %
(参考)						
米国	3.8	▲ 18.4 %	0.99	▲ 19.6 %	3.89	1.3 %

資料：USDA「World Agricultural Production」 (January 2015)

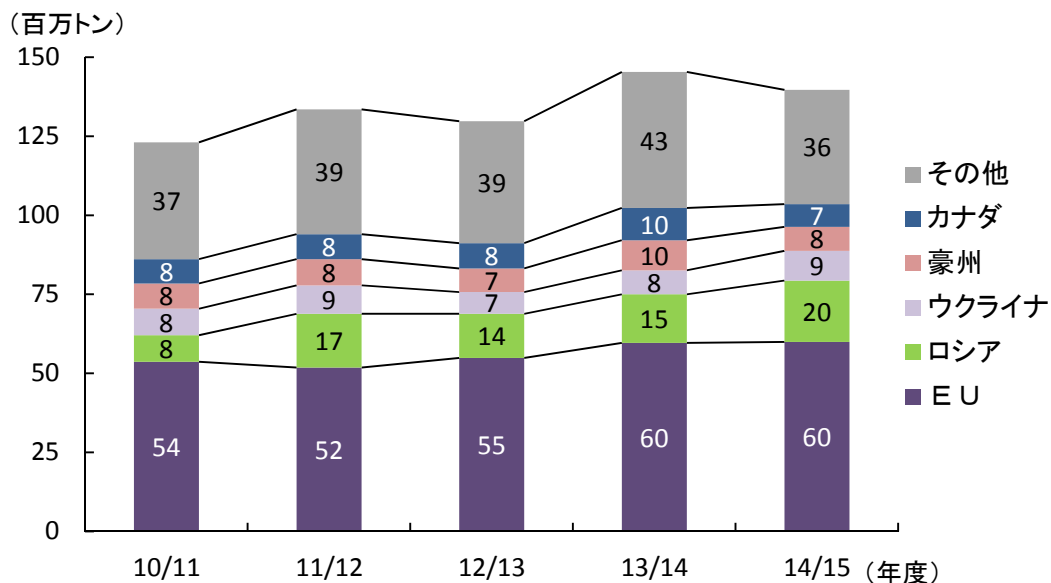
ウクライナでは、春大麦の作付時期には温暖で土壌水分量も適度となり、作付作業は例年並みか若干早めに開始された。4～6月は降雨に恵まれて気温も平年を上回り、作柄は良好な状態が維持された。生産量は、収穫面積が減少（▲0.9%）するものの単収が上昇（25.6%）することから、前年度より増加（24.3%）し、9.4百万トンになる見込みである。

豪州では、収穫面積が前年度を下回り（▲3.1%）、作付時期や生育初期の土壌水分量が十分であったものの、東部の産地で冬から春にかけて高温・乾燥型の天候に見舞われたこと等により単収が低下（▲17.7%）することから、生産量は前年度より減少（▲20.3%）し、7.6百万トンになる見込みである。

カナダでは、なたね等の他の作物への作付転換が行われたことや前年度からの持越在庫が多かったこと等により収穫面積が減少（▲19.2%）するとともに、生育及び収穫期間中に続いた冷涼湿潤型の天候により単収も減少（▲13.7%）することから、生産量は前年度より減少（▲30.4%）し、7.1百万トンになる見込みである。

米国では、単収は上昇（1.3%）するものの収穫面積が減少（▲19.6%）することから、生産量は前年度より減少（▲18.4%）し、3.8百万トンになる見込みである。

図 IV-21 世界の大麦生産の状況



資料：USDA「World Agricultural Production」、「PS&D」（January 2015）をもとに、農林水産省で作成。

イ 消費量

2014/15年度の消費量は、主に飼料用需要が前年度を下回ることから、世界全体で0.3百万トン減少（▲0.2%）し、140.8百万トンとなる見込みである。

なお、2014/15年度の世界全体の消費量に占める国・地域別の割合を見てみると、世界第1位のEUが

37%、第2位のロシアが10%、第3位のサウジアラビアが6%と、上位3カ国・地域で全体の半分以上を占める見込みである。(表 IV-24、表 IV-25、図 IV-22、図 IV-23)。

表 IV-24 世界の大麦消費の状況

(単位:百万トン)

区 分	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15 (予測)	対前年度 増減率(%)	世界に占め る割合(%)
世界合計	136.2	135.2	131.7	141.1	140.8	▲ 0.2	100
うち飼料用	91.3	91.7	89.0	97.4	95.5	▲ 1.9	
E U	56.6	51.2	51.0	53.5	52.5	▲ 1.9	37
ロシア	9.5	14.3	12.1	12.6	14.3	13.5	10
サウジアラビア	6.3	7.2	8.3	8.4	8.5	1.2	6
カナダ	7.5	6.9	6.8	7.7	6.7	▲ 13.2	5
トルコ	6.0	6.8	6.2	7.0	6.1	▲ 12.9	4

資料：USDA「Grain：World Markets and Trade」、 「PS&D」 (January 2015)

飼料用大麦の消費量は、ロシア、サウジアラビアで増加するものの、カナダ、EU等で減少することから、世界全体では前年度より減少(▲1.9%)する見込みである。なお、飼料用穀物の種類別消費割合は、前年度に比べて大麦は低下(11.2%⇒10.6%)するものの、小麦、とうもろこしは上昇(15.0%⇒15.5%、66.1%⇒66.2%)する見込みである。

EUでは、飼料用大麦の消費量は前年度を下回る見込みである。また、飼料用穀物の種類別消費割合は、前年度に比べて大麦は低下(22.3%⇒20.8%)するものの、小麦、とうもろこしは上昇(34.0%⇒32.9%、28.2%⇒31.5%)する見込みである。

ロシアでは、生産量の増加に伴い飼料用大麦の消費量は前年度を上回る見込みであり、同消費割合は、前年度に比べて、大麦、小麦は上昇(26.2%⇒27.1%、21.1%⇒22.8%)するものの、とうもろこしは低下(39.9%⇒37.0%)する見込みである。

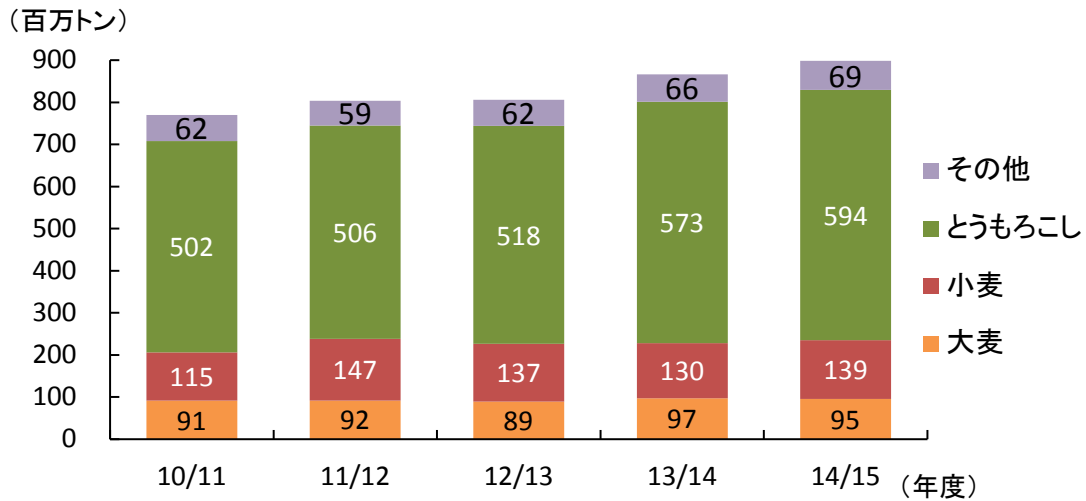
表 IV-25 世界の大麦の飼料用消費の状況

(単位:百万トン)

区 分	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15 (予測)	対前年度 増減率(%)	世界に占め る割合(%)
世界合計	91.3	91.7	89.0	97.4	95.5	▲ 1.9	100
E U	41.3	35.8	35.5	38.0	37.0	▲ 2.6	39
ロシア	5.5	9.8	7.7	8.2	9.5	15.9	10
サウジアラビア	6.3	7.2	8.3	8.4	8.5	1.2	9
カナダ	6.3	5.7	5.7	6.6	5.5	▲ 15.9	6
トルコ	5.1	5.8	5.3	6.0	5.2	▲ 13.3	5

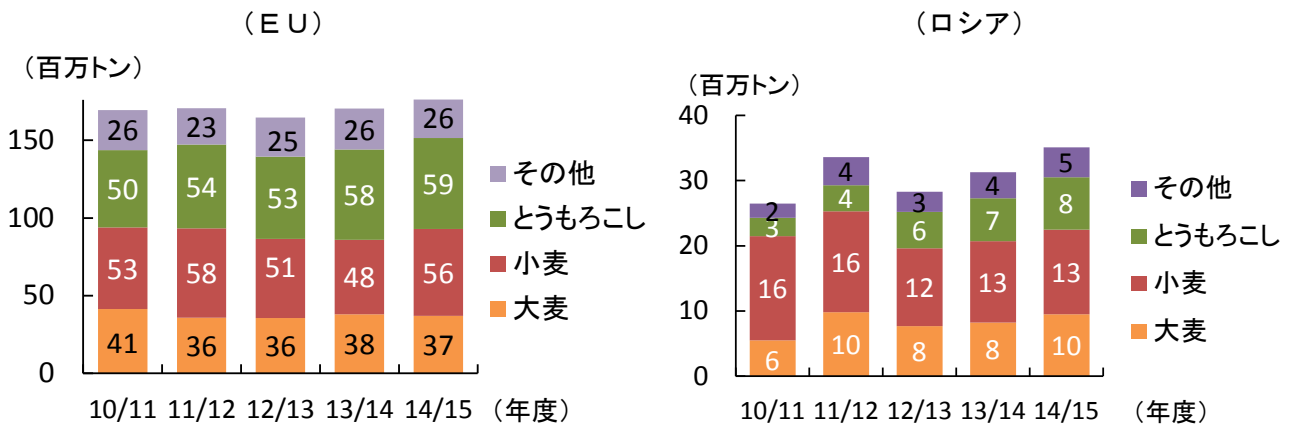
資料：USDA「Grain：World Markets and Trade」、 「PS&D」 (January 2015)

図 IV-22 世界全体の飼料用穀物の需要内訳



資料：USDA「Grain：World Markets and Trade」、 「PS&D」 (January 2015) をもとに、農林水産省で作成。

図 IV-23 大麦主産国・地域（EU・ロシア）の飼料用穀物の需要内訳



資料：USDA「Grain：World Markets and Trade」、 「PS&D」 (January 2015) をもとに、農林水産省で作成。

ウ 貿易量

2014/15年度の貿易量（輸出量）は、アルゼンチン、豪州で前年度を下回るものの、ロシア、ウクライナ、EUで前年度を上回ることから、世界全体では前年度より0.7百万トン増加（3.1%）し、23.6百万トンになる見込みである。輸入量は、サウジアラビア、中国で前年度を下回るものの、トルコ、イラン等で前年度を上回る見込みである。（表 IV-26、図 IV-24、図 IV-25）

表 IV-26 世界の大麦貿易の状況

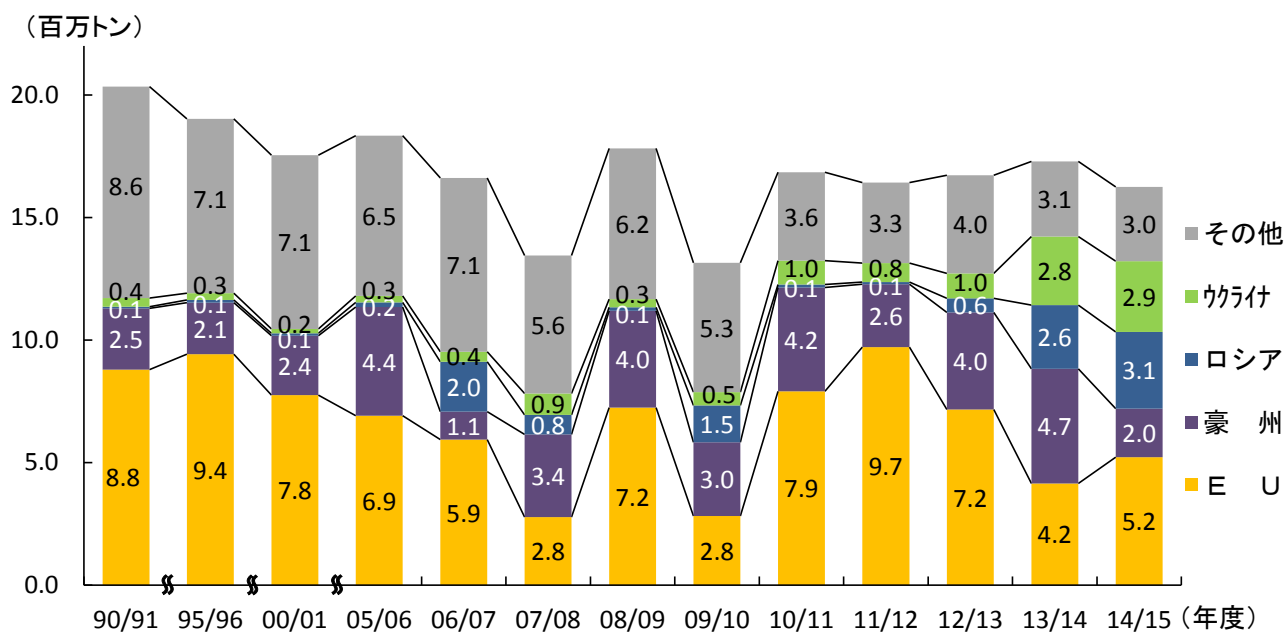
(単位:百万トン)

区 分	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15 (予測)	対前年度 増減率(%)	世界に占め る割合(%)
世界合計	15.9	20.4	19.6	22.9	23.6	3.1	100
(輸出国)							
EU	4.9	3.0	4.9	5.7	6.7	16.7	28
豪州	4.7	5.4	4.5	6.2	4.5	▲ 27.6	19
ロシア	0.3	3.5	2.2	2.7	4.3	60.4	18
ウクライナ	2.8	2.5	2.1	2.5	4.0	61.6	17
アルゼンチン	1.6	3.6	3.6	2.9	1.6	▲ 44.8	7
(輸入国)							
サウジアラビア	5.5	8.7	8.5	9.5	8.0	▲ 15.8	-
中国	1.7	2.5	2.2	4.9	4.5	▲ 8.0	-
トルコ	0.1	0.0	0.3	0.1	1.5	1,644.2	-
日本	1.4	1.3	1.4	1.3	1.3	0.5	-
イラン	0.4	1.2	1.6	0.9	1.2	33.3	-
米国	0.2	0.4	0.5	0.4	0.8	86.8	-

資料：USDA「PS&D」(January 2015)

2014/15年度の世界全体の輸出量に占める国・地域別の割合を見てみると、世界第1位のEUが28%、第2位の豪州が19%、第3位のロシアが18%と、上位3カ国・地域で全体の約3分の2を占める見込みである。

図 IV-24 世界の大麦輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」(January 2015)をもとに、農林水産省で作成。

EUでは、生産量が前年度を上回ることから、輸出量は前年度より増加（16.7%）し、6.7百万トンになる見込みである。

豪州では、生産量が前年度を下回ることから、輸出量は前年度より減少（▲27.6%）し、4.5百万トンになる見込みである。

ロシアでは、生産量が前年度を大きく上回る（26.7%）ことから、輸出量は前年度より大幅に増加（60.4%）し、史上最高の4.3百万トンになる見込みである。

ウクライナでは、生産量が前年度を大きく上回る（24.3%）ことから、輸出量は前年度より大幅に増加（61.6%）し、4.0百万トンになる見込みである。

アルゼンチンでは、生産量が前年度を下回ることから、輸出量は前年度より減少（▲44.8%）し、1.6百万トンになる見込みである。

ルーマニア南東部カララシ（2014年7月）
ドナウ川のリバーターミナル(対岸はブルガリア)



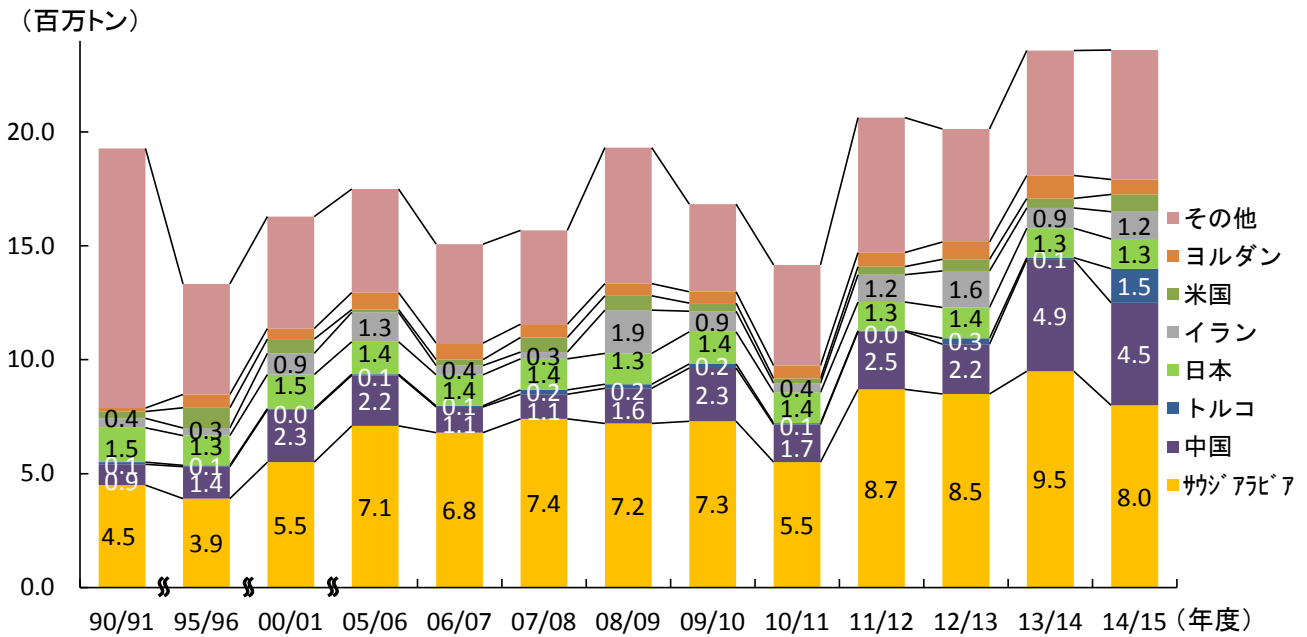
カナダ マニトバ州ウィニペグ
レッド河を渡る貨車（2014年9月）



輸入については、サウジアラビアでは、大麦は、輸送・保管がしやすいため、輸入量のほとんどが羊、山羊、らくだ等の家畜用の飼料として用いられているが、政府が家畜にとって消化しにくい生の大麦よりも栄養価の高い加工飼料の製造・利用促進を図っていること等から、輸入量は前年度より減少（▲15.8%）し、8.0百万トンとなる見込みである。

中国では、生産量が前年度を上回るとともに消費量が前年度を下回ることから、輸入量は前年度より減少（▲8.0%）し、4.5百万トンとなる見込みである。なお、2013/14年度は、飼料用需要の増加に伴い2012/13年度から大きく増加（123.9%）している。

図 IV-25 世界の大麦輸入量の推移



資料：USDA「PS&D」(January 2015)をもとに、農林水産省で作成。

エ 期末在庫量

2014/15年度の期末在庫量は、生産量が消費量を下回ることから、世界全体で前年度より1.1百万トン減少(▲4.3%)の24.0百万トンとなり、期末在庫率も17.0%(▲0.7ポイント)に低下する見込みである。

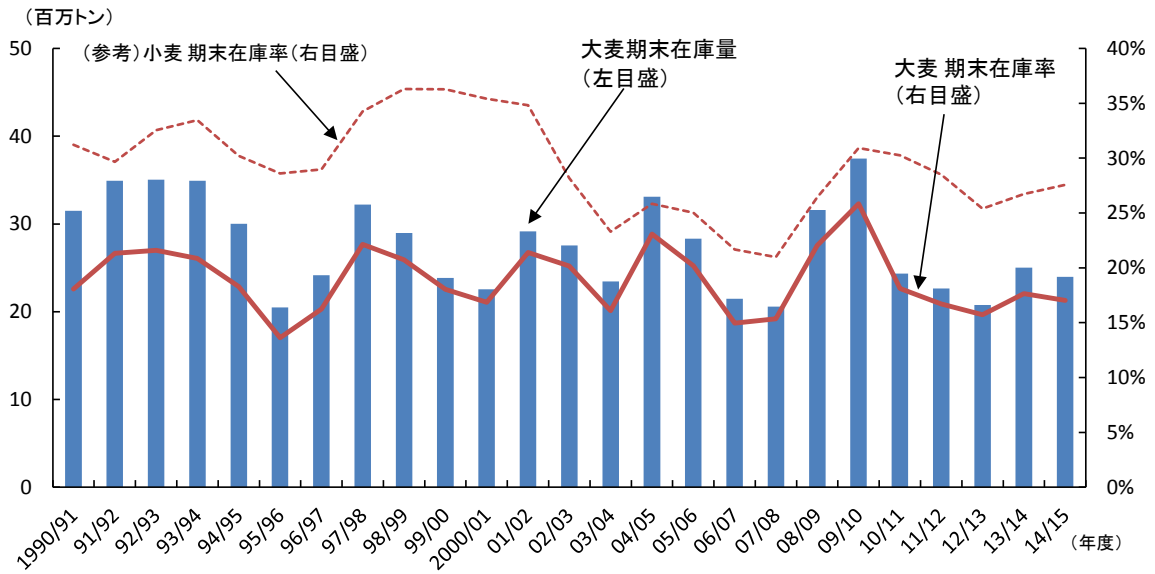
国別には、豊作となったロシア、EU、ウクライナで前年度を上回る一方で、飼料用需要が増加するものの輸入量が減少するサウジアラビア等で前年度を下回る見込みである。(表 IV-27、図 IV-26)

表 IV-27 世界の大麦の期末在庫の状況

区分	2010/11	2011/12	2012/13	2012/13	2014/15 (予測)	対前年度 増減率(%)	世界に占める 割合(%)
世界合計	24.3	22.7	20.8	25.0	24.0	▲4.3	100
EU	7.9	6.1	5.1	5.5	6.3	15.0	26
サウジアラビア	1.3	2.8	3.0	4.1	3.6	▲12.5	15
ロシア	1.4	0.8	0.7	1.0	2.0	102.8	9
米国	1.9	1.3	1.8	1.8	1.8	▲0.1	7
ウクライナ	0.8	1.2	0.9	0.9	1.4	57.2	6
期末在庫率	17.9%	16.8%	15.8%	17.7%	17.0%	▲0.7	-

資料：USDA「Grain：World Markets and Trade」、「PS&D」(January 2015)

図 IV-26 世界の大麦の期末在庫量（率）の推移



資料：USDA「Grain：World Markets and Trade」、 「PS&D」 (January 2015) をもとに、農林水産省で作成。